

シンポジウム／口承文芸研究のこれから

三〇年前のぼくから

三〇年後のあなたへ

高木 史人

二〇〇六年、日本口承文芸学会は設立三〇年を迎えました。三〇年前、私は大学一年生でした。夏には初めてフィールドワークに赴き鳥取で安東花おばさんに出会い、秋には日本女子大学の小澤俊夫さんのゼミに訪ね閣敬吾先生のお話を聞きました。余談ながら、北海道から上京した私がした初めての調べごとは、アイヌの昔話についてでした。図書館でどんなに恐れ多いことかも知らずに、知里真志保著作集や出たばかりの久保寺逸彦著『オイナ・聖伝の研究』をひっくり返していました。

それから三〇年経った二〇〇六年六月に白百合女子大学で、三〇年記念のシンポジウムが開かれて、思いがけなく、萩原眞子さんと共に司会をするようにと仰せつかりました。じつは、夏が終わろうとしている今、あの日のことを思い返そうとしても、こまごまとした記憶はどこかにちらばってしまっています。今回のシンポジウムの構想は、白百合女子大学での大会を引き受けた間宮史子さんと中村とも子さんが立てたものでした。ま

た、このシンポジウムの大枠をしっかりと導いていたのは会長の萩原さんでした。私がここでご報告をするのは、本来、場違いなのです。これから私が申すことには誤りもあるかもしれません。お許しを願います。

今回のシンポジウムのコンセプトは、日本口承文芸学会の過去・現在・将来を反省・分析・提言することにあつたのだと思います。そのために、学会誕生時の研究を野村純一さんに振り返ってもらい、研究の現状を酒井正子さんに分析してもらい、これからの研究のあり方を真鍋昌賢さんに提示してもらおう。パネリストは、だいたいこんな人選であつたと記憶しています。これを、当初は「第一世代、第二世代、第三世代」と呼んでいました。もつとも、こういう世代への称呼には、違和感がありました。たしかに同時代精神とでも呼ぶべき心の傾向があることは否定しえません。知識や学問のあり方についていうならば、竹内洋『教養主義の没落』（二〇〇三年、中公新書）や同『丸山真男の時代』（二〇〇五年、中公新書）などで論じられている同時代精神の傾向やハビトゥスについて、われわれは鈍感ではいられないでしょう。けれども、誰もがその傾向の中に埋没してしまっている（―いた）のかしらんという疑問もあります。いつの時代にも、異端はいたんです、きっと。

野村純一さんも、異端児でした。「話型」研究が主流だった時代に、「話型」から一步身を引いていました。昔話研究懇話会だつたかしら、あるシンポジウムのときフロアーから、野村

さんが、私は話型には情熱を失った人間ですから……と発言して、当時学部生だった私はとてもびつくりしました。そのころ、野村さんは関敬吾の『日本昔話大成』の仕事を手伝っていたのですから。もし私が「話型」について冷徹だとみえるならば、それはおそらくあのときの野村純一さんの発言の影響です（ほんとうは大好きなんですけれどね）。

同様に、酒井正子さんも只者ではありません。音楽（一史）学的な民謡研究（音楽の分析）と、文学（一史）的な民謡研究（詞章の分析）とに引き裂かれて、しかもそれらが主流を競っていた研究領域に、そのどちらにも偏らず、しかもウタに係わる研究者の自分や現代の社会の影響をも含みこんだウタ社会の多面体のありようを長期的なフィールドワークという手法によってまるごと描き出そうとしました。描き出すには、文章だけではなく、あるときには、たとえば学会の例会じたいをパフォーマンスと化してしまふように仕掛けることもありました。もちろん、ここにいう「まるごと」が素朴な「まるごと」であるはずはなく、じつは、方法的に選ばれた「まるごと」でありました。フィールドワーカーであることが重要です。酒井さんは、フィールドワークの他者性を強く感じさせる、いわば、醒めた情熱の持ち主として、この世代の中では、かなり異端であると思います。

そうして、真鍋昌賢さんは領域がおもしろい。従来、語り物の末裔としての浪曲を扱った人には、兵藤裕己さんがいました（『声』の国民国家・日本）。近代日本における浪曲通史として

兵藤書はあったのですが、兵藤さんの中心のフィールドは山鹿良之さんだった、浪曲は派生的なテーマの一つだったように思います。真鍋さんは、それを自分の研究の中心に据えました。柳田國男の「口承文芸」からすると、考えられなかったようなテーマを扱ったのです。また、真鍋さんの研究対象と一時的な音声に限らず、むしろ積極的にSPやラジオなどの二次的な音声の分析に向けられているのも、大切な押さえどころだと思います。

ここまで書いて、ひと月放置しました。再開。

この、只者ではない異能の三人が話し合うのだから、司会はとても楽でした。このシンポジウムの所期の目的が果たされたかどうかは、当日参加の会員各々で判断してください（飯倉義之さん方の感想（『伝え』三九号）もご参照ください）。

最後に、司会者のほくが用意した資料で説明する時間がなかったものについて触れます。それは、当日配布した資料中の一枚、日本口承文芸学会理事の変遷一覧表です。この学会には理事選挙で連続三選禁止の規定があり、したがって学会設立時の理事が総入れ替えになる期があったのです。制度的には、これがこの学会が今まで過去・現在・将来をうまくシャッフルする機能を果たしていたと思います。三〇年前のほくから三〇年後のまだ見ぬあたへとうまく研究の橋渡しするためには、こういう制度的裏付けが重要だと気づいたので、一言申し添えました。

（たかぎ・ふみと／名古屋経済大学）